

Title	鍵盤上を飛遊するdiscretionとファンタジー : J. J. フローベルガーのチェンバロ曲にみられる表現装置
Author(s)	三島, 郁
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43323">https://hdl.handle.net/11094/43323</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	三島 都 <small>みしま かのる</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 16506 号
学位授与年月日	平成13年9月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	鍵盤上を飛遊する <i>discretion</i> とファンタジー —J.J.フローベルガーのチェンバロ曲にみられる表現装置—
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美  (副査) 教授 山口 修 教授 柏木 隆雄

#### 論文内容の要旨

チェンバロ音楽で名高いドイツの作曲家、ヨハン・ヤーコプ・フローベルガー (1616-1667) の作品を取り上げ、演奏とそこに見られる個々の即興的な行為における知的感性的判断の問題を論じた研究であり、本文・参考文献・人名索引・譜例集からなる (A4判185頁)。演奏習慣が一旦すたれたチェンバロ作品で、しかも舞曲のような拍節的な感覚だけでは処理することが難しい作品の演奏をどのように行ったらよいのか、といった観点から問題の設定が行われている。対象とされる作品は「哀悼曲」として分類される7曲である。

この問題の解決に向けて本論で行われている考究は、次の4つの段階(章)からなる。

- 1) フローベルガーが影響を受けたフランスとイタリアの演奏習慣を探究すること。前者ではリュートに特有の奏法をチェンバロに移し替えていったフランスでの奏法が装飾の観点から捉えられ、後者ではフローベルガー自身が師事したイタリアの作曲家フレスコバルディの《トッカータ集》(1615-1635)の序文の検証が行われる。しかしこれらのみでは現実の演奏にはまだ距離があるという観点から、作曲者についての弟子や同時代の演奏家の意見を見ることもあわせて行われている。
- 2) 次に7曲の「哀悼曲」の分析が行われ、通常は即興で演奏され、したがって楽譜には書かれられないような音符が、これらの作品においては記入されていることに注目することにより、フローベルガーの音楽における装飾音、アルペッジョ、それらの緩急の変化、フレーズの区切りの音符の処理などが、読み解かれてゆく。また、4度下行・2度上行といった特定の音型が、楽器奏者の手の癖のようなものと捉えられることから、そこにも即興の特質が読みとれるとしている。
- 3) さらに、このような即興性の中心的な問題であるタイミングを考えると、これらの作品に記入されている *discretion* という概念が重要な意味を持つことに着目し、様々な語法の検討が行われる。そして、演奏者が大事なポイントにおいては的確かつ決定的な措置を行わねばならないことを示すのがこの語の意味であり、その点で、「経験に基づいて、頭の中で構想されたものが手指を通じて現実化される際の操作」であるファンタジーと深く関わるものであることが説かれてゆく。
- 4) しかし *discretion* とファンタジーは、単に演奏の純粹に音楽的なあり様や演奏者の運動的行為に関わるだけでなく、それらが「哀悼曲」としての哀しみの表現の装置としてはたらいっている、ということに考察は展開してゆく。こうした装置が働いているからこそ、今まで単なる「前奏曲」の域にとどまっていたジャンルが、フローベ

ルガーにおいて、新しい表現的な意味づけを与えられたのだ、ということが結論として示される。

### 論文審査の結果の要旨

この論文は、演奏上の問題に対して実際的な技術的解決を提供しようとするだけでなく、演奏論の歴史的文献の検討、楽曲の分析、さらには *discretion* やファンタジーという概念についての考察を通じて、総合的な音楽論を展開しており、研究者としての真摯な姿勢を窺わせる労作である。とりわけ優れているのは、一見小さいと思われるような演奏上の問題から、音楽史、楽曲分析、言語解釈、そして音楽行為論にいたる一連の考察が、相互に密接に結びついて展開されている点である。またチェンバロという、音の減衰の急速な楽器において、「響きを空虚にしない」という観点から行われる即興的な埋め合わせと、それが実は「哀しみの表現」に深いところでつながっていることを論じている点は独自の所見であり、学的刺激に富む部分である。楽曲分析における楽譜の読みも深く、十分な説得力を有している。

しかし、本論文にいくつかの短所が見受けられることも否定できない。すなわち、考察が演奏の次元に即して展開されている反面、作品論についての考究が必ずしも充分には行われていないこと。*discretion* とファンタジーの概念について、両者の本質的差異を明確に示した上で、実際の場面における関連を論じるべきであったこと。また「哀悼」という、作品の表現特質に関わる美学的な考究が後退していること、である。しかし、これらの問題は、今後の研究において個別に論議を深めることにより、高度な解決が期待されうるものであり、本論文が音楽学、とりわけ西洋音楽史学の分野にたいして多大な貢献を示すことを損なうものではない。よって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。